

飛ぶ様に帰宅し部屋に駆け込む。ビニール袋の口を開けると、咽せ返る程の牡の臭いが鼻をついた。震える手が取り出したのは、動画の中で千夏が身に付けていたスリッパとショーツだった。グッショリと吸い込んだ樹液が糸を引いて床に滴る。

ゴクリと唾を飲み込んだ。心臓の鼓動は耳を聳する程だ。

(母さんは…これを着て、これを穿いて犯されたんだ…)

画面の中で菊薔を買かれ、あられもない声を上げていた母の姿が蘇る。

(母さん…母さん…)

引きちぎる様な勢いで服を脱ぎ全裸になると、重く濡れたショーツに脚を通し、腿を滑らせた。細っそりとした下肢が精液でヌラヌラと光る。濡れた薄布が勃起した若茎を締め付ける感覚に思わず声が漏れた。冷たく肌に張り付くスリッパを引っ張り上げ、肩紐に腕を通す。

鏡には、少年の身体に女性の下着を身に付けた奇妙な人物が写っていた。ナイロンのレースに透けた、平な胸と小豆色の乳首。股間でスリッパを盛り上げる膨らみ。

脈打つ怒張をショーツの上からスリッパで包むと、猛烈な勢いでしごき始めた。ローションを塗られた様にヌルヌルした布が龟头を擦る。

『薫、だめよ…私、お母さんなの…そんなことしちゃだめ…』

母の悲鳴が心の中に響く。薫は母を犯すと同時に、犯される母になっていた。

「母さん…母さん…出るッ」

『だめッ、薫だめえッ』

下着の中で肉棒が爆ぜた。

「…母さん…ひっく…母さんッ」

母を呼びながらショーツの中に精を放つ。快感に声が漏れた。脚から力が抜け、ガクガクとその場にしゃがみ込む。手の中が粘っこい液体でジワリと暖くなる。溢れた白濁が床に小さなプールを作った。

「今度は千夏さんが薫君を犯すんだ」

「ひいひいッ…い、いやあッ、いやですッ、そ、そんな事できませんッ」

一瞬絶句した千夏の口から悲痛な叫びが迸った。死にものぐるいでもがく母親を四人がかりで跪かせる。

「…あ、あなた達どこまで…どこまで酷い事をすれば気がすむんですッ」

千夏が始めて見せる、怒りに満ちた表情だった。

「薫君はされたがってるよ」

振り返った薫の顔には、不安と入り混じった期待の表情が浮かんでいる。そして待ちきれないかの様に腰がうねっているのだ。

「ああ…薫…だめよ…」

「さあ、観念するんだ、奥さん」

「いやッ、いやッ」

目の前に薫の双臀があった。頼りない程に細い骨格は、本物の少女の様だ。そしてその間にはこれから蹂躪される器官が収まっている。いつもなら慎まやかな風情を見せているはずのそこは、今、腫れぼったくめくれ上がって粘膜を晒し、注ぎ込まれたばかりの白濁をトロリと吐いていた。

「ああッ、だめッ」

張り型の先端が我が子の菊薔にコツンと当たる。田辺達は千夏の肌に指を食い込ませてそのまま腰を押し付けた。

「ひiiiiiiiiッ」

千夏が絶叫する。男根が潜り込むに連れ、達也の注いだ白濁がジュブジュブと音を立てながら押し出されてきた。薫も又、甲高い悲鳴で母に応える。

「…許して…薫…許して…」

千夏は繋がったまま許しを乞うた。汗ばんだ腿の前面が少年の腰に貼り付いている。薫はハッハッと犬の様に喘いでいたがやがてゆっくりと腰を動かし始めた。